OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『ペンサムの伝説』
Author(s)	ダイ，ママーング；松木園，久子
Citation	印度民俗研究. 2019, 18, p. 29-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/72056
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『ペンサムの伝説』

ママーング・ダイ著

松木園 久子　訳

私たちの言語、つまりアーディ族の言語で、「ペンサム」とは「中間」を意味する。中心や中州を指すだけでなく、秘密の花園が息づく、心のなかの隠れた場所、と訳されることもある。それは小さな世界であり、どんなことも起こり得るし、あらゆることが行われる。つまり、そこでは人生という小舟が穏やかな天気にも嵐のときもどうにか前進し、人の一生が歌の長さで測られる、そんな場所だ。

著者によるノート

インド東北部のアルナーチャル・プラデーシュ州は、ブータン、中国そしてミャンマーと国境を接する、国内最大規模の州であるとともに最も緑豊かな州のひとつでもある。東部ヒマラヤの一部で、110 以上の氏族を持つ 26 の部族の故郷であり、彼らはそれぞれが異なる言語または方言を有する。大地には河川が縦横に交差し、南北に走る高い山脈によって 5 つの河谷に分け隔てられている。河川のうち最も勢いのあるのがシアーング川で、チベットではツァンポ川として知られている。これがインドへと流れ込むツァンポ峡谷へ向かって、北へ広がるシアーング谷がこの本で描かれるアーディ族の領土である。

アルナーチャルの中央一帯に暮らす部族の大半と同じく、森林エコロジーや自然界との共存をもとに織りなされるアニミズム信仰をアーディ族も実践している。彼らの領土をつなぐ道路はほとんど存在しない。遠くの村へ行くには、いまだに川を渡ったり、象に乗ったり、うっそうとした森や高い山道を徒歩で進むなどという面倒は避けられない。

しかし、毎日何マイルも歩いている村の年寄りたちは言う。「大地を見れば、つらいことも痛いことも忘れてしまうさ」そして、本当に美しい景色なのだ。これまでは、隔離状態がアルナーチャル・プラデーシュの原始林と豊かな生物多様性を保護する最善の手段だった。1992 年以来観光ルートがいくつも開通したが、州は今なお外部からの訪問者に対しては、実効支配線内部と制限区域への立ち入りのために手続きが課されている。

序言

ヘリコプターが雲を掻き分け進んでいく。気流にぶつかり浮かび上がるが、次の瞬間に急降下するようだ。私は目の前の空席にしがみつく。

私たち 6 人は、古びて、何とか動いている機械に乗っており、誰もが黙っているか寝たふりをしている。眼下には大きな川が、昏睡状態に陥っているかのように、茂みと砂地にはさまれ、静かに凍りついている。

実際にその河川系全体は穏やかなものである。輝く大海から一片を取り出したように、大地の上にガラスの流れが広がっている。アッサム高原の向こうの山々の、最初に見える稜線は深い緑が茂る密林だ。次は非常に狭く深い渓谷で、曲がりくねった穴だらけの山と山の間に刻みこまれている。もっと高い山々がぼんやりと前方に現れるが、そこには隆起した地面がのこぎり歯のような山頂に折り込まれているのだ。

まもなく平地が姿を消す。ここから先に道はない。私たちは速度を上げる。雲が私たちとともに疾走する。雲は私たちを追い越すと、隠れた谷へと私たちを引きずり込む。私の故郷だ。

〜

私は山の村に生まれた。サッカーのまねをして男の子が石を蹴飛ばしていたようなところだ。乗り物が学校の校舎まで登っていくたびに胸を躍らせて、私たちは温かい石の上を飛び跳ねていった。そして原っぱの際まで駆けおりて急停止すると、好奇心でドキドキしながら古いジャックフルーツの木の下に立っていたものだ。

夢のように年月はめぐった。よそ者が私たちの道を横切ることはまれだった。毎晩竹でできたベランダに腰を下ろしては一族の兄弟姉妹と星を眺め、その並び方に合わせて、名前を考え出したものだった。たしか、光の根元にあるのは鋤だったはず。いや、神々と織物の腕を競った女のひとだったかしら。もう今ではどうでもいいことだが、あの頃は見上げると星空がすぐ近くにあり、光が直に私たちに向かっているような気がした、というだけのことだ。

当時を振り返ってみれば、村は生命に満ちていて、私は思いがけないことが起こるのではないか、ものを話したり考えたりする力を持ち光り輝く霊魂のごとく、軽やかに魔法の網の目を飛び越えることができるのではないかと、胸を膨らませていた。歌を歌っている森のように、未来は私たちの前に広がっていた。私たちはいつでも翼を広げ、冷たい竹を飛び抜ける用意ができていた。

今と比べるつもりはない。川は昔と変わらず大地を横切って、はるか遠く海へと流れ込む。春には赤い花々が今でも空を背に、燃えるように咲いている。しかし火が燃え尽きて灰になろうとするように、生きながらえた数少ない年寄りは今やゆっくりと眠りにつこうとしている。夜半に鳥が舞い降り、激しく、鋭い鳴き声を響かせる。草ぶき屋根が音を立てる。竹の裂ける音がする。闇のなかに息遣いとため息が立ち込めている。

雨はやさしく訪れ、夜を濡らす。そしてときには雨が作り出す幕のうしろに、名前や顔が浮かんでくるのが見える。それはまるで忘れさられた人々が綺羅星のごとく、各々の行路と運命において再び輝きを取り戻すかのようだ。

世界の日誌―私たちの血に刻まれた長い旅―

空から落ちてきた男の子

ホクソが初めて世界に向けて目を開いたとき、見えたのは緑だった。木々や竹が緑色の壁をなし、緑の滝は彼の頬にしぶきをかけ、手を振っているように見える巨大なシダを濡らしていた。

動きは非常に素早やかった。彼は後に父と呼ぶことになる男の背に負われていた。このとき分かっていたのは、堅くて汗のにおいがする籠のなかに縛られているということだけだった。この男の力強さが感じられたのは、見知らぬ土地を無言で走り抜ける間、大きな背中に頭を押しつけ、強い心臓の鼓動を聞いていたからだ。

ホクソは巨大な木々の間を通り抜けるこの旅より前の出来事は何も思い出せなかった。世界について、人と森について話すときに、塩と血の味そして自由落下の恐怖感を覚えるのだが、なぜこんなことになるのかわからなかった。夢で見ていたのは、焼けつくような太陽が地球へと向かって回転し、そして真っ赤な炎を吹き出しながら爆発し、血と灰で目がくらむ、というものだった。だからこそ、そんな恐ろしい光に比べれば暗闇の方がましだといわんばかりに、あのときしっかり目を閉じていたのだと彼は考えた。

緑色はいつも彼の心を和らげてくれた。逃避と孤独の色だ。自分が何からいつ逃げていたのかは定かではなく、ときおり一人になるためになぜ森へ入る必要があるのかもわからなかった。

山の上の家に着くと、女が走り出してきて、二人を出迎えた。ホクソにはすぐに彼女がやさしい、いい人だとわかった。背が高くて、若く、愛情と気遣いをそなえた、生き生きした顔つきをしていた。

「あれまぁ！男の赤ちゃんじゃないの」と彼女は言い、籠のからホクソを抱き上げた。それはもう半世紀以上も昔のことだが、あの感触を得た瞬間に勝る幸せを、ホクソは今日でも思い出すことができない。

家にはほかに子どもがいないことをホクソはすぐに感じ取った。自分の年齢もわからなかったが、誰も何も言わなかったし、自分だけがほかの子どもとちがって、お父さんとお母さんのどちらが好きかと聞かれることもなかった。学校へ上がると、周りの子どもたちにじろじろ見られた。誰もあいさつもしてくれかったが、期待と必死さのあまり自分の笑顔がぎこちなかったことは覚えていた。ラークトが彼の初めての友だちになった。

「ほら、取ってみろよ！」ラークトが石を投げると、二人の間を弓なりに飛んだ。それはラークトが遊びに使おうと選び抜いた、平たい川の石だった。二人の友情は素晴らしいものだった。母がライス・ケーキを作ってホクソの友だちを呼ぶときは、バカみたいににやにやしたラークトが一番乗りだった。ホクソはといえば、両親が気前よく振る舞ってくれるのが嬉しく、鼻が高かったので、自分ではほとんど食べられなかった。あるとき父がキタリスを持ち帰ると、ホクソはラークトの家まで走っていき、見に

来てくれと思い切り叫んだ。毎日二人は新しいものを見つけた。毎日どんどん村から離れて山を探検し、毎日、それも何年もの間、お気に入りの山の頂上の平らになっている場所まで登っては、木々や籐の茂み、そしてまばゆい夏の光を相手に話しかけたり、思いを聞かせたりしながら、空き地まで飛び降りたりしたものだった。

ある日ホクソはまたラークトを呼びに走っていったのだが、不思議な物音を聞いた。二人は家の周りを抜き足差し足で歩いていき、精一杯背伸びをして、竹の支柱に走っている割れ目を覗き込んだ。

「本物だったぞ」ホクソの父は言っていた。「ピシャっと音がして振り向いたら、川の端が盛り上がってきて、長くてキラキラした魚か、ヘビか、いや何でもいいさ、そいつの背中を水が流れていったんだ。すぐに消えちまったがな。でも、見たんだ。本当だからな」

「えぇ、ありえないよ！」

「本当に見たんだぞ」

「どんな風だったの？」

「頭に角がついた気がするな」

「まさか」

今ではミズヘビのビリビクの話は誰でも知っている。それを最初に見た人物の名前はもう何世代も忘れられているが、出来事は皆の記憶にしっかりと刻み込まれている。それはある激しい雨の夜のこと、網を持った漁師が川岸に一人でいた。水を掻き分けるときのような音がしたかと思った瞬間、自分が休んでいた木を見上げると、枝でヘビがとぐろを巻き、年寄りのような目つきをして見下ろしていた。一番うろたえたのは、そのヘビの頭に角が生えているという事実だった。漁師は命からがら村へ走って帰ったが、誰にでも予想できたように、あの恐ろしい幻覚の禍から立ち直ることはできなかった。一年のうちに消耗性の病気のため死んでしまった。

前兆というものを真剣に考える人なら誰にでもわかることだが、ホクソの父がそのヘビを見たからには、異常なことが再び起こるにちがいなかった。森の真ん中を切り拓いた小さな空き地で、人々は前触れを体験した。女たちは夢を見る。赤ん坊は生まれると、鹿やライオンの子どものように、

不自然なほど早く成長する。幼児死亡率が高い。老婆たちは今も蔓を編んで、道中の無事を祈る。

そんなわけで、ホクソの父がその後まもなく猟の事故で亡くなったときも誰も驚かなかった。悲劇は予想されていたのだ。この山に火器が持ち込まれてからというもの、人々は猟に夢中になった。ある日誰かが突如として立ち上がり、銃を取って森に消えていくのだった。多くの猟師が何日も姿を消したり、見張り台に集まったり、警戒のため大ぶりの枝に留まっていることがあった。村の向こうの森で猟師が行く手を分かれて分散し、ホクソの父は獲物と間違えられた。鹿だと思ったのか。それとも熊か。撃った人は取り乱して、答えられなかった。ただ何かが動いて、誓って人間ではありえない暗い影だったということしか覚えていないという。その後衝撃と怒りの叫び声に耳をつんざかれ、棘だらけの下生えをがむしゃらに走り抜けると、友が顎のすぐ下の圧痛点を撃ち抜かれているのを目にしたのだ。血は流れ、目は大きく見開かれていた。

「あぁ……やられた！」彼はしゃがみこんで、自分の銃を地面に向けていた。右手も撃ち飛ばされていたので、銃で肩を支えていたのだ。

彼の友は狂人のように森中を走り回って、泣き叫んだ。「助けて！助けてくれ！」叫び声に村中が震え上がった。皆が家から飛び出してきた。「あいつを運ぶのを手伝ってくれ！」

皆が夜通しかかって、死体を持ち上げ、森の端から端まで運び、ときには引きずりときには押しつつ、呪ったり泣いたりしながら、濡れた落ち葉とぬかるみを踏み越えて山を下った。村に着いたときには、男たちは傷だらけで、泥と死者の血が染みついていた。恐ろしい光景だった。ホクソの母は泣き叫びながら飛び出した。幼いホクソは寝ぼけ眼で、白熱する炎のように空を切ってひらめく母親の幻覚を見た。母が動かなくなった体を抱きしめ、砕けた頭部に頬を押し付けるのを見た瞬間に、彼は全てを理解し、愛の秘密が明かされた。

それから彼女は言った。「体を覆って、うちに入れてやってちょうだい」

人殺しは死罪だが、寄り合いがすぐに行われ、交渉可能な事態であると被害者側が納得した場合はその限りではない。今回の事案では、友人は不

幸にも一ヶ月の間森に追放され、獣のような生活を送ることになった。近親者は調理した食料を運ぶことができたが、食べられる食品の種類についての禁忌が多すぎるため、自活させる方が容易だった。追放に異を唱えるものはいなかった。とりわけ、自分も誰かを獲物だと勘違いする運命にある人々の間では。

誰も当時、あるいは後にも説明できなかった唯一のものは、死者のシャツのポケットで見つかった小さな魚だった。それはつるつるすべり、押しつぶされていたが、シャツを引き裂いて、体から血を拭おうとしたときでも鱗が皮膚にくっついてしまっていた。ひょっとするとそれは彼がどこかの小川で彼が捕まえていた魚かもしれない。ひょっとするとホクソのために持ち帰ろうとしていたものかもしれない。またひょっとすると何かほかの霊魂の現れだったのかもしれない。それは誰にもわからないことだった。

このようななりゆきだった。イダー族の名高い長であり、空から落ちてきた男の子の父であるルータルの死は広く悼まれた。そして、すでに多くの若い女性が猟の事故で夫を失っていた村で、ホクソの母が加わり寡婦がまた一人増えることになった。

猟師カーレンの奇妙な事例

大きな町を訪れている間に、私は話のついでにこの村のことを友人モナに話した。彼女はある雑誌の編集者で、いつも面白い話を探していたので、私が住むグルダムの町までついていくとすぐに決めた。そこから私たちは一緒に寡婦の村へ行こう、というのだ。

モナと私がドゥヤーングに着いたのは初夏のことで、そこは私の亡くなった母の先祖の村でもあった。私たちはホクソと家族に会うため山を登った。私の記憶どおり、ホクソの家にはいつも人があふれていた。彼のふたりの息子とそれぞれの嫁がいて、さらに今では子どもが 5 人いるのだが、そこへひっきりなしに友人や兄弟姉妹、親戚がただおしゃべりや噂話をしたり、ベランダに腰かけて紅茶やライス・ビールをすするためだけにやってきていた。昼夜を問わず、いつも火が焚かれていて、巨大な鍋や重い蓋

つきの平鍋にはあと 10 人来ても十分振る舞えるほど料理や残り物がたっぷりあった。急に訪れる客人も絶え間なく、彼らはほこりだらけで、轍のついた道や、船の航行、伐採が進む密林など旅の話は尽きることがなかった。

私たちが山を登って家に着くと、ある女性が迎えに出てきてくれた。ロシーだった。私の亡くなった母は、ホクソと彼女、つまり地上に落ちてきた男の子と川の女のもとに生まれた女の子が、どのように出会い、結婚に至ったのかという話をしてくれたものだ。ロシーの振る舞い、微笑み、目には、どこをとっても温かさと人の良さが出ていた。それからホクソの母が強い日差しに目を細めながら出てくると、ホクソが初めて会ったときと同じように、そして私もそうだったように、モナはその魅力に降参した。もうずい分年は取ったが、頭は切れるし、鋭いのだ。モナは村の話に興味があると私が伝えたとき、彼女は黙っていた。それから頷き、もしお客が望むなら、孫のボダクに話をさせれば面白いのではないかと言い出した。

このようにして私たちはカーレンの奇妙な物語を聞いたのだ。

つい最近の出来事なので、まだ声をひそめて話されていた。カーレンは何週間もマラリアにかかっていた。熱におかされては、怒りの喚き声をあげたり、今に熱をやっつける薬をみつけてやる、と叫んだりした。そうして寝床で体を丸めては、熱が引くまで震え、汗をかくと、ふたたび落ち着いた目で辺りを見回すのだった。ある朝、男たちの一団は狩に出かけることにした。彼らは何日もの間、森に落ちている野生の果物を鹿が食べに来る一画に杭を立て、立ち入らないようにしていた。ある穏やかな夏の朝、カーレンは運動と新鮮な空気が必要だと言って、一行と共に出発した。

一行はキールクの掟に従い、選ばれた者が一画を叩いて獲物を追い出し、ほかの者は銃を構えて待ち伏せていた。昼前に男たちは、猟場の境界線となっていた川の向こうで枝を揺らしながらさかんに甲高い声を上げている猿の群れを見た。それは見慣れない光景で、猿たちはまるで、木から木へと飛び移って上流へ向かいながら、男たちに手を振り、呼びかけているようだった。狩の一行は行く手を分かれて、樹上の一団の後を追うことに

した。先へ進むか留まるかを決めたのが誰だったかはあやふやだが、ボダクが覚えているのは、全員がほとんど同時に右岸を上流へ向かいだしたということだった。だから、猿たちがいる岸の反対側の下生えから急にカーレンが姿を現したとき、非常に驚いたのだ。

ボダクが戻ろうとすると、カーレンは静かにしろと合図した。熱の発作から回復したばかりだからだろうか、カーレンは古い毛皮の帽子をかぶっており、止められる者がいるなら止めてみろとでも言わんばかりの奇妙な、挑むような笑みを浮かべていることにボダクは気づいた。猿の肉が血にいいこととマラリアを直すと信じられていることを思い出したに違いないと、ボダクは察した。その場では何も言わなかったが、共に行動するため早く川を渡ってくるようにカーレンをせかした。カーレンはすぐうしろについていくからと、ボダクに先に行くよう手振りをした。間もなく午後のまぶしい日差しが突如消えた。猿の群れも姿を消した。そしてボダクは、重苦しい静けさが立ち込めるように、地面にこもった熱で密林が湯気を立て始めるのを感じた。

不運な一行の誰もが、雷鳴が静けさを引き裂き、叩きつけるような雨が降り出したとき、皆が腰を抜かしたと後に語った。ほんの一瞬前には雲一つなかったというのに！逃げ惑う途中大きな叫び声がして、すぐに自分たちの身に不運が降りかかっていることを知った。ボダクは大声で一人ひとりに気をつけろと呼びかけ、居場所を答えろと叫んだのを覚えていた。カーレン以外は皆いた。ロマと呼ばれていた男が銃を手にじっと立ちつくし、今しがた向こう岸の猿に向けて銃を撃ったと言った。何も言わずボダクは急いで川を下ると、男たちは皆後に続いた。しぶきをあげ狂ったように川を渡ると、カーレンが木にもたれかかっていたのだった。雨が激しく降り、血があふれ出していた。体内で破裂した銃弾で、彼の体はほとんど粉々になっていた。男たちはできる限りのことをしたが、それもたかが知れていた。使いがひとり村へ知らせに遣られ、ほかの者は遺体を多少なりとも原形をとどめたまま連れ帰るために、カーレンを抱え上げ、はるか下流の籐の橋へ向かった。

死人の体を動かすのがどんなにむずかしく、恐ろしいことか想像つくまい、とボダクは言った。遺体は滑り、ちぎれた手足が自分の腕のなかでバラバラになるかもしれないという恐怖で男たちは息が詰まり、身震いがした。橋にたどり着くと、ボダクとロマが先頭に立って遺体を運び、残りの者は銃とカーレンの帽子を持って後に続いた。遺体を持ってボダクが橋を渡り終えた瞬間、籐の縄がほどけ、橋はなかほどで垂れ下がった。つんのめったほかの男たちは川へ落ちた。呪われた午後だった。村人は竹に火をともし、夜通し男たちの帰りを待った。彼らはまるで悪霊の領土から帰ってきたかのように、正気を失い呆然としていた。

カーレンの寡婦となったオマムは、当時義父母と暮らしていた。小さな子どもが二人おり、自分もまだ二十代半ばにもなっていなかった。私たちが会ったとき、まだ彼女は髪をうしろに結って、色鮮やかな留め具をつけており、体操選手のようだった。水を汲み、夕方の火を灯し、豚と鶏に餌をやり、嘆いたり、なじったりすることもなく、暮らしを続けた。

村もまた営みを続けた。オマムと同じく、まるでプログラムされているかのように、意識しなくとも回復力を備えていた。けが人や死人が出る最中でも、生きることや愛することは暫定協定だと言わんばかりに、新婚夫婦は喧嘩し、家を飛び出し、子どもを置き去りにし、互いに悪口を言い合った。一、二ヶ月もすれば、気弱なおとなしい顔をして戻ってきて、呪いの言葉を吐いたり、笑ったりしながら、いわば山あり谷あり、先をも知れない家庭生活にやっと身を落ち着けるのだった。

しかし二度と戻ってこない者も常にいた。怒りと錯乱に引きずられるように山を越え、川を下り、あまり遠くに離れ過ぎてしまうと、残された者たちは彼らなしでも生きるようになる。彼らは死者のように、ときおり歌や物語のなかで思い出されるのだった。

アデラとケピーの沈黙

ロシーは私たちのためにごちそうを作っていた。私はホクソとモナとともに竹のベランダに座り、肩を寄せ合う家々から出る薪の煙が立ち込める夕

闇に目をやりながら、私が読んだことしかない世界が、一本道しか通っていないこの埃っぽい村にすっかり再現されているような気がした。それと同じように、森のなかのこの集落での愛情や命の誕生、出来事はみんなどこかほかのところでも起こりうるものだ。運命に切り裂かれるか、あるいはすくい上げられるときまで、人はどこにいようと何とか折り合いをつけて、やっていくものなのだ。

ホクソの母は私たちのためにライス・ビールを持ってくると、モナの隣に腰を下ろした。すでに二人の間には不思議な絆ができていた。モナの心に深く触れるものがあったのが私にはわかった。ホクソの母が私の方を向き、「お客のことだけれどね、子どもはいるのかい？」と尋ねたとき、モナには通じていた。「皆さんに」彼女は言った。「皆さんに私の娘のために祈ってくださいと伝えて」

モナはアラブとギリシアの血を引いており、夫のジュールズはフランス人だ。二人はどこから見ても精力的で、成功した夫婦である。彼は著名な開発学者で、彼女は光沢紙仕様の『世界の日誌』という雑誌の所有者だった。その雑誌は珍しい実話を掲載している。私に言わせれば、可動式ライフスタイルを持つ夫婦だ。国も大陸も股にかけ、当時はニュー・デリーに短期赴任中だった。

ジュールズの方がモナよりも旅することが多かった。ジュールズが長期の旅行に出ていたあるとき、アパートに一人でいたモナは三歳になる娘の異変にふと気づいた。夫婦はガルワール出身の中年の寡婦を家政婦に雇い、非常階段が近くにある屋上の小部屋を与えていた。体はがっしりし、文句も言わず何でもこなす女だった。モナの娘アデラは家政婦が大好きで、二人はとても相性が良かったので、モナは家を空けるようになり、次第にオフィスで書類を読みふけったり、コンピュータとにらみ合う時間が増えていった。そしてある日、娘は何も話そうとしなくなった。

モナは娘のそばにしゃがみこむと、言葉を出させようとしたが、娘は長い間彼女を見つめ返し、そして生まれてこの方モナなど見たことがないかのようにそっぽを向いたのだ。

それから数日、モナはわが子と格闘した。

「いい子だから！ねぇ！何があったか教えてよ！」と彼女は叫び、反応させようと娘を揺さぶった。

モナは医者のもとへ行き、親戚や友人に相談した。一族の病歴をたどろうと、母親に電話をかけた。しかし、これまでこのようなことは皆無だった。自閉症的な行動につながる可能性のある喘息や自己免疫系の病歴は一族にはなかった。というのも、そのときには幼いアデラに自閉症の不可解な症状だという診断が下されていたのだ。

ジュールズが帰ってくると、二人は激しく言い争った。

「この人が何かしたに決まってるわ」モナは怒り狂って、足元で泣き崩れている家政婦を責めた。

「今そんなことを言って何になるんだ！」とジュールズはモナに叫んだ。

平手打ちのようにその言葉はモナに突き刺さった。ジュールズの態度や声色はモナの責任だと言っているようで、腹が立つやら悲しいやらで、彼の顔に唾を吐きかけて、これっきり家を出て行こうかとモナは思った。

「いつも世界中を飛び回っているのは彼の方じゃない。サボっても構わないようなミーティングだってたくさんあったのに、そうしなかったのよ」あのひどい日々を思い出すたびにモナは怒りで泣きそうになるのだった。

結局、彼らはアデラを自閉症児童の学校へ入れた。わが子が席に着き、紙とクレヨンをもらったとき、不安と悲しみに体が震えた。担任の女性は彼らに、同じようなケースはたくさんありますから、勇気を持ってくださいと語った。

私のあとに、モナは「あの子を取り戻したいだけなの」と言い、分かってほしいと思いを込めてホクソと母を見つめた。「もう一度母親になりたいのよ」そして、自分が何か物を落としたときやテーブルにぶつかったり、大きな声をあげたとき、娘は何の感情もなしに笑うのだと言った。

ホクソは黙って私たちの話を聞いていた。そして、「取り返しのつかないこともあるのだ。そんなことはいつだって起こる。覚悟しておいた方がいい」と彼は言った。

それから彼は、幼いアデラが世界から身を引いたのと同じような頃にカリヨン・トガムの一家に降りかかった悲劇について、私たちに語って聞かせた。

〜

それは隣村ヤブゴの端にある遊び場で起きたことだった。トガムの息子はそのときちょうど二歳を過ぎたころだった。咳でゼイゼイいうので、父親のウールのスカーフを母親が巻いてやり、家事手伝いのために雇っていた幼い少女に背負わせた。少女といっても 11 歳か 12 歳ぐらいにしかならないような女の子にくくりつけられて、その子は気持ちよさそうだった。少女は優しく声をかけてやりながら、ほかの子どもたちと一緒にじっと立っているつもりで遊び場へ出かけた。その子どもたちも皆ショールや籐ひもで弟や妹をしっかり背中にくくりつけていた。彼らは子どもらしく大騒ぎをしながら、飛び回った。ジャックツリーの葉で刀を作ったり、家々の間を走り回ったり、泥や石の上を競争したりしていた。薄暗い家のなかで綿糸を紡いでいた、年老いた寡婦のダージェルだけは彼らの元気さにいらいらしていた。

「転ばないように気をつけな！」と怒りながら彼女は叫んだ。

その日の夕方遅くになって、その子は体が燃えるような熱を出した。母子は火のそばで横になり、夜通し発作に見舞われた。朝になると、彼女は息子が動かないのに気がついた。経験豊富だったので、彼女は急いで総合病院へ駈け込もうとはしなかった。すでに二人の女の子を育てていたから、子どもは何だかんだと病気をするものだということはわかっていた。それでも心配になった。子どもの症状がよくならないので、両親はついにピゴにある病院へ連れていくことにした。彼らは早朝、山のふもとの道を通るたった一本のバスで出かけた。町に着いたのは昼だった。常勤の医者は不在だったので、新しい医者の診察を待たなければならなかった。彼らの順番が回ってきたときにはすっかり遅くなっていたが、医者は親切だった。いくつか錠剤を処方し、幼いケピーに注射をするよう看護婦に指示した。

それから医師は、この子は一週間温かくして寝かせておきますから、その後連れて帰っていいですよ、と言った。

ケピーはその後よくなりそうな気配だった。母親はすりつぶした飯と白湯を与え、子供も口を開けて与えられるものをみな食べた。しかし夜になると、甲高い、嘆くような声をあげ、母親は背筋の凍るような恐怖に襲われた。ある朝、父親トガムは男の子の上腕に黒っぽい痣があるのに気づいた。前からあったのかもしれないが、男の子が背負われていた籠のひもでついた痣だと勘違いし、病院に駆け込んだり、夜通し見張ったりして気を張り詰めていたため、あまり気にも留めなかったのだった。年老いたダージェルが訪ねてくると、不機嫌そうにこう言った。こないだはあれだけ子どもたちが遊びまわって駈けずりまわっていたんだから、もしあの女中がその子を落っことしたとしても驚かないよ、と。問われると、女中は滑って転んだことを認めたが、決して赤ん坊を落としたりはしなかったと言った。二人で一緒にドスンと地面に着地したんです。それだけです、と。

その日昼も夜もトガムが妻に話しかけることはなかったが、ついに妻は、禍は私のせいだと思っているのでしょう、と怒鳴った。翌朝、彼が何も言わず妻の腕に手を触れると、夫もまた恐怖を隠していたのだと彼女は悟り、許すことにした。

静かに、ゆっくりと、日々は過ぎ去った。子どもたちは家族にとっての命であり、今や誰もが恐怖にとりつかれていた。あぁ！口を大きく開け、声にならない叫び声をあげている子どもの姿を見ている両親を救おうと、村中が集まった。ケピーの母親は泣き、食事を与えたときに指で感じた息子の唇の感触に怯えた。トガムは何かに引きずられるように右往左往し、訪れる人皆に黙って頷いた。親戚の助言に従って、いくつもの儀式が執り行われた。トガムは有名なシャーマンを探して、広く遠く旅をした。一年がたった。子どもはこの間もずっと動かなかったが、胴を捩じったまま硬直させ、動かないまま、叫んだり、食べたり、眠ったりした。彼らは至るところへ子どもを連れて行った。そのうち、特別な儀式を行うことを考えるべきではないか、と言い出す者がいた。それは最近では滅多に行われな

い儀式だが、万が一息子さんの体に巻きついているのがヘビの霊だったら、というのだ。

その儀式を執り行うために呼ばれたのがホクソだった。彼は私たちに今でははっきりと状況が分かると言った。彼に見えたのは、トガムがある晴れた日の朝、木を伐採中の森の真ん中にある材木置き場へと出かけるところだった。丸太がまだ山積みの状態で、その日は象が借り出されていた。丸太を溝の上に渡してある作業台まで運ばせ、そこで印をつけ、のこぎりを当てるのだ。作業員たちが大声でしゃべりながら、丸太の山の方へ向かうと、象がふいに足を止めた。いくらなだめようが、突っつこうとも脅そうとも、その獣は一歩も進まなかった。苛立っている男たちにも、丸太の間にヘビが住処を作っているのかもしれないとわかり始めた。それ以外に、高さが9フィートもあり、その気になれば彼ら全員を殺すほどの力がある、牙を持った動物を怯えさせるものなどいるだろうか。

トガムはキングコブラかもしれないと思った。何も見えなかったが、丸太を動かす勇気などなかった。コブラのどう猛さは伝説になっており、怒らせなくても攻撃することは知られている。このヘビが鎌首をもたげて不運な人間の後を走って追ったという例などいくらでもあった。ひとたび毒牙が突き刺されば、あごに絶え間なく力を入れ続け、餌食に最大限の毒を送り込むのだ。

一晩中トガムは寝ずに丸太と象のことを考えていた。妻のため息が聞こえ、葉っぱがカサカサと音を立てているような気がした。満月が昇っていくのが見えた。どうすべきか、と彼は迷った。ありとあらゆる動物に囲まれて、森に生きてはいるが、多くの友人とはちがって、トガムには狩の経験はなく、殺したくはなかった。もし本当に丸太の山のなかにヘビがいるのなら、夜の間に出て行ってくれと彼は祈った。

翌朝、重い気持ちで古い帽子を身に着け、ショットガンを装備した。使わなくて済むようにと願った。カートリッジを2つだけ持って出た。

皆は再び象をなだめたが、やはり動こうとはしなかった。トガムは居場所を決めると、丸太のそばに長い間しゃがみこんだ。何も動きはない。ほかの男たちと象は日陰に入り、トガムは背中が焼けるような気がした。突

然玉虫色の光に目が眩み、はっと息を飲んだ。金色、緑、濃いアメジスト色に変わり、言いようもないほど美しい輝きだった。その刹那彼は銃を構え、突然現れ、日光のなかに消えてしまった幻覚に向けて発射した。発砲で何も見えなくなった。丸太が粉砕し、木切れが四方八方に飛び散るなか、ドスンという音がした。男たちは殺到したが、玉虫色の光はすでに消えていた。彼らはもう一度待った。何も動きはなく、すべて前と変わらず、静止したままで音もなかった。もう男たちは待ち切れず、苛立っていた。

「なあ、丸太を動かしてみようぜ」と一人が言うと、男たちは呪いの言葉と唾を吐きながら丸太を持ち上げ、転がし始め、トガムは再び銃で狙いを定めた。彼の体のあらゆる神経と筋肉が緊張した。彼は心を無にして、ただ銃を構えたまま待ち続け、うち損ねないことを祈っていた。そして恐ろしいものを見たのだ。丸太の動きに合わせて、とぐろを巻いた巨大なニシキヘビが鎌首をもたげ、激しくのたくりながら、一巻きずつとぐろをほどいていたのだ。トガムがその後忘れられないほど恐ろしかったのはヘビの完全な無音状態だった。銃で撃たれて体は真ん中で裂かれていながらも、なおもがき続け、黄色い目のなかの垂直な瞳孔に午後の光が差し込んでいた。トガムは息を殺した。自分の髪が逆立つのを感じ、ほとんど反射的にぐるぐる回る頭部へ向けて発射した。運が良かった。頭部は吹き飛んだ。ヘビの体はうねり続けていたが、日光と周囲の緑の森が消えてなくなるのと同ときに、トガムはこの世のものとは思えない光の瞬きがすぐ目の前で消えていくのを見ていた。

「こんなわけでヘビの儀式を行わねばならなかったのだ。しかし、時間の問題ということもあるのだ」とホクソは私たちに言った。彼によると、病の子どもを元に戻してくれと訴えながら、彼らは一晩中唱え、霊に掛け合ったが、霊はべつのところへ行ってしまい、呼び戻すことができなかったそうだ。「あれは最も危険なやつらで、行ったきり戻ってこないやつらだ」と彼は言った。

モナと私は聞いていた。私はほかの村人と同じく、その話をよく知っていた。「こんなことはいつだって起こるのだ」ホクソは言った。「自分の身に起きてみて、初めてわかるものだ」

ホクソはこんな風に語り続けた。彼は時間のない地帯に住んでいるかのように見えた。どこか遠く離れたところにいながら、この村の家で緑色のガルクとカーキ色のズボンを着て、人や動物、植物の生命、宇宙の起源に対する自分の興味のままに動いているのか、あるいはただ単純にどうすればチェスが上手くなるのかを考えているのだ。人や獣のどんな状態や行動にも決して驚くことはないようだった。私がアデラの自閉症について話したとき、彼は耳を傾け、理解し、そっとモナに対してお気の毒にと伝えることができる人だ。私はといえば、初めてモナから聞いたとき、図書館でその用語の意味を調べなければならなかったし、心配と動揺のあまり、彼女の苦しみに寄り添うことができなかった。

その二人の子どもには共通点があった。音楽が好きだったことだ。大都市の自閉症児童のセンターでは、奇妙な不協和音を立てて子どもたちの声が高くなったり、震えたりするとき、モナとジュールズは目に涙を浮かべながら、じっとしていた。そして、自分たちの娘が小さな太鼓をたたき、歪んだ笑顔を浮かべるのを見て、慰められるのだった。村では、トガムの幼子が一日中寝たきりで部屋の隅々まで届くラジオの音楽に耳を傾けていた。彼に見分けがつくのかどうかは誰にもわからなかったが、そんなことはおかまいなしに彼の姉妹とその友だちは、周りに集まったり、面白い顔をして見せたり、ときにはやさしくつついてみたりしていた。

いつその家族を訪問しても同じだった。彼らに会いにモナを連れて行ったとき、ラジオは鳴っていて、男の子の母親は笑顔で私たちにあいさつをした。若くて、活気のある女性だった。トガムは痩せていて色黒だったが、部屋の隅から起き上がり、新しい女中がしばらく里帰りしているから、今は自分が子守りなのだと笑いながら言った。私たちは苦いお茶を飲んだ。何でも奥さんがやっていた。ケピーの姉妹は痩せた脚をした、年頃の女の子になっていたが、うろうろ歩き回ったり、お互いに体をぶつけあったり

するので、ついには母親が、ゆっくり話ができないから外へ出なさい、と声を荒らげた。

もう一度、彼らの日々が過ぎていくさまを私は目にした。炉で赤々と燃える火、炎のそばで体を丸めている犬たち、片隅に置かれた寝台。生活は至極当たり前に過ぎていく。ただ世界中で、あまりに多くの目につかない場所で、あまりに多くの人々と同じように、痛みを隠しながらも、季節が巡り来るだけのことなのだ。

使用テキスト

Dai, Mamang 2006. *The Legends of Pensam.* New Delhi: Penguin Books.

著者ママーング・ダイ（1957– ）はアルナーチャル・プラデーシュ州イーターナガルを拠点とする、詩人、小説家、ジャーナリスト。詩、フィクション、記事が多数のジャーナルや選集に収められている。詩集『リバー・ポエムズ』、短編集『ペンサムの伝説』、小説『ストゥーピッド・キューピッド』などの作品を発表。2003 年『アルナーチャル・プラデーシュ―隠された大地』にたいしてヴェリエ・エルウィン賞、2011 年には文学・教育の分野での貢献が認められパドマ・シュリー賞、そして 2017 年小説『ブラック・ヒルズ』でインド文学アカデミー賞を受賞している。

ここに訳出したのは、『ペンサムの伝説』に収められている物語三編である。一人称の語り手「私」がアーディ族の人々から聞き取った「伝説」を採集したもので、インド文学によくみられる枠物語のような構成となっている。その一つひとつには、アーディ族独特の暮らしぶりがうかがえると同時に、著者自身も記しているように、世界のどこにでもありそうな普遍性を感じられる。ほかの物語も継続して、翻訳していきたい。最後になりましたが、翻訳を快諾し、訳者の質問にていねいに答えて下さったママーング・ダイ氏に心から感謝します。